連載ミニエッセイ １５

都大路のすぐそばで

２４期　徳田完二

京都の「都大路」は駅伝のコースになる。全国規模の大会は十二月の都道府県対抗高校駅伝（男子、女子）と一月の都道府県対抗女子駅伝である。私の家はそのコースから至近距離にあり、一分もあれば沿道まで出て直接観戦ができる。また、ベランダからでもほんの少しだけなら見えなくもない。そう言えば、広島に住んでいた時も都道府県対抗男子駅伝コースに近かった。

駅伝を生で観戦できるメリットは有名な選手を直に見られることである。広島では、かの宗兄弟の兄、宗猛選手がだいぶ苦しげな表情で走るのを見たし、京都では福士加世子選手がニコニコしながら走るのを見た。

沿道で選手たちの到来を待っていると、選手たちの前を走る先導車やテレビ中継車がまず姿を現し、その後おもむろに一位または一位集団が近づいてくる。その時の、テレビとは違うワクワク感も生観戦のメリットだろう。目の前を選手たちが駆け抜けて行くのを見、沿道からの声援を生々しく聞けることもそうである。

駅伝を直に観戦をしてよくわかるのは選手たちの走りが「めちゃくちゃ早い」ことである。近づいてきたと思っていると、あっという間に走り去ってしまう。テレビ中継に使用するカメラは望遠レンズを使っているので、正面から選手たちを捉えた映像では距離が圧縮されて見える。このため、肉眼で見た時の距離感とはだいぶ違い、選手たちの走行速度が実際より遅く見えるのである。そういう映像を見慣れていると、生で見た選手たちの足の速さに驚かされる。生観戦のもう一つのメリットは、このように選手たちの「実速」を体感できることだろう。

しかし一方、生観戦にはデメリットもある。そのうち最大のものはレースの全体状況がつかめないことである。

私は去年（2023 年）の都道府県対抗高校女子駅伝を生観戦した。その場所は一区から二区への中継点だった。私と同郷の隠岐出身で、岡山県から出場した奥本菜瑠海という選手の動画をスマホで撮り、それを中学の同級生たちの LINE にあげたかったからである。

沿道に並ぶ観戦者に混じって選手たちの到来を待っていると、先導役の白バイとテレビ中継車がやってきた。すかさず私はスマホを構えた。トップは奥本選手。観戦者たちの隙間からわたしはその勇姿を撮った。それはいいのだが、私が見たのはわずか数十秒のあいだ奥本選手が走る姿だけだった。中継点につくまでのところで京都代表の立命館宇治高校と熾烈なトップ争いがあったことをその時は知らなかったし、自分が目撃した後のレースがどうなったかもわからなかった。何事にも一長一短がある。

さて話は変わる。全国大会の駅伝を見るたびに寂しく思うことがある。それは、わが島根県

勢が、高校駅伝にしろ、都道府県対抗駅伝にしろ、いつも下の方の位置に甘んじていることである。三十位台ならまだいい方で、四十位台であることもめずらしくない。人口が少ないから仕方がないのだろうか。しかし、日本で一番人口の少ない鳥取県勢はたいてい島根県勢よりも順位が上ではないか。島根県勢の成績の背景にあるのは、県民性なのか、選手強化の予算不足なのか、指導者不足なのか、事情通でないわたしにはわからない。でも、もうちょっと頑張ってほしい。駅伝のたびにそう思う。小学校の運動会でかけっこ万年ビリを誇った私が言うべきことでないのだろうけれども。

連載ミニエッセイ １６

気候それぞれ

ところ変われば品変わると言うが、もちろんところ変われば気候も変わる。

「弁当忘れても傘忘れるな」という言葉がある。これは、出雲地方に限らず山口県を含む山陰全体で言われているようである。雲が湧きやすく、しぐれることの多い土地柄を表した言葉だが、島根にいた高校時代まで、とくにそういう実感はなかった。ほかの土地を知らないため、比べようがなかったからかもしれない。

気候にその土地ならではの特徴があることを実感した最初は、大学生になって京都に住んだ時である。盆地である京都は、夏はむやみに暑く冬はむやみに寒かった。とりわけ冬の底冷えはなかなかのもので、からだの芯まで寒さが染み入る感じがした。近年では地球の温暖化のせいもあって、昔ほどではないが。

京都から広島に引っ越した時は、瀬戸内に特徴的な気候現象があることを知った。それは見事と言いたいほどの夕凪である。海と陸の温度差から、日中は海風が、夕方から朝にかけては陸風が吹き、その境目に朝凪と夕凪がある。そういう現象が一年を通してあるわけだが、夏の夕凪は極めつきだった。夕方になると空気の流れがピタリと止り、そよとも動かなくなるのである。辺り一帯を包む蒸し暑い空気がまるで固まってしまったように感じられた。陸の温度が海より下がって陸風が吹き始めるまでの間、その状況から逃れることができない。その「空気が固まってしまったような感じ」はじれったい気持ちになるほどで、体中にじわ〜っと汗がにじんできた。それが夏中続いた。

広島から札幌に移住した時は、北海道の冬の寒さを毎年体感した。夜遅い時間にマイナス十度以下の道を歩いていると、体温がじわじわ奪われていくような感じがした。このまま歩き続けると命が危ないかもしれない。ふとそんな気がしてちょっと怖くなることもあった。

その一方、冬は寒いほど美しいのだった。空気中の水分が凍りついて、葉を落とした木の枝にびっしりと付着し、あたりじゅうの木々がまっ白になるのである。実に幻想的な光景だった。学校の校庭を取り囲む金網も同じで、真っ白い網目模様が現れた。それは夜間に起きる現

象で、朝の陽射しを浴びると氷の結晶は少しずつ解け、音もなく散っていく。そのはかなさにも趣があった。

夏はどうかというと、湿度が低いので暑さは乾いていた。日向にいると遠赤外線の直火に当たっているような感じがするが、日陰は涼しかった。夜はだいぶ気温が下がるので、寝苦しい日は少なかったように思う。扇風機があれば十分だったから、クーラーを設置していない家が普通だった。ただ最近では、地球温暖化のせいで、北海道の夏もだんだん「本州化」しているようである。

ところで、冬の北海道は屋内がとても暖かい。大きな石油ストーブ（しばしば床暖房付きの）や、壁に設置したパネルヒーターで「がんがん」暖めるからである。真冬でも子どもたちが半袖で過ごす家庭もめずらしくなかった。北海道に住むまで、北海道の人は寒さに耐える力が強いのだろうと思っていたが、実はそうではなく、寒がりで暑がりだと自認している人が多かった。

ただ、雪かきにはみな精を出した。それをサボると大変なことになるからである。下手をすると家から出られなくなってしまう。

北海道の雪は、山陰や北陸の湿って重たい雪とは違い、ふんわりした軽い雪、スキーヤーが喜ぶパウダースノーであることも多かった。でも、このごろはどうなのだろうか。今は他人事になった北海道の気候が時々気になる。